論　文

歌舞伎、文楽、能楽の大連公演（1935年）は誰によって鑑賞／支援されたか

――現地刊行の新聞報道記事からみた分析――

仲　　万美子
同志社女子大学
学芸学部・音楽学科
教授

Abstract

It is not widely known that professional Japanese entertainers gave kabuki, noh, and bunraku performances in Manchuria during the colonial period that extended from the late 19th to the early 20th centuries. Based on an analysis of articles drawn from daily and specialty newspapers published in Dalian, my paper, examines how these performances were received by Japanese residents in the region and attempts to determine whether they were interested in music and the performing arts as an area of private study. I focus on 1) the manner of promoting and reporting each performance tour; 2) the type of venue and performer; and 3) the level of public interest in watching and studying the performing arts.

はじめに

21世紀の現在、歌舞伎、文楽、能楽など所謂「純邦楽」に組み込まれている日本伝統音楽・芸能をライブで視聴したい場合、インターネットを利用し、関連団体のホームページにアクセスをして、公演日程、演目、出演者をチェックし、チケットを予約できる環境が、専門家／愛好者にも整えられている。しかし、今から100年程前にさかのぼれば、情報を入手できる手段はかなり限られたものであった。ラジオが普及するまでは、SPレコードに録音された名優の声を聴くことは可能であったにせよ、基本的にはライブ視聴するために「劇場」に出向かねばならなかった。そして各ジャンルの専門誌や芸能関係月刊誌の記事を手がかりに予告あるいは劇評を読み、次回の公演を楽しみにしていた。

しかしながら、本研究で対象としている、いわゆる「外地」に居住する人々はどのようにして情報を得ていたのだろうか。ふと素朴な疑問を心に浮かべる人は、筆者以外にも多くいるのではないだろうか。否むしろ、「外地」では日本伝統音楽・芸能は実際に鳴り響いていたのであろうかという根本的な疑問を持つ人の方が多いのではないだろうか。

筆者は、明治末から大正初めにかけて、明治3年生まれの祖父が大連および近郊の地に医者として居住していた際に、「謡」を習い始め、芝居を見ていたことを知っていたので、「外地」でも日本伝統音楽・芸能が息づいていたことに

Who watched and supported the kabuki, noh, and bunraku performances in Dalian in 1935? : An analysis based on locally-published newspaper articles

疑問は抱かなかった一人である。すなわち祖父の書き残した日記には、お稽古でどのような曲を習っていたかを記しており、習い始めた頃は三日にあげず指導して頂いていた。しかし残念ながら現地にはどのような師匠がおられ、そして「素謡」あるいは「能楽」の上演がどのようにされていたかの実態を知る資料は手元には残されていなかった。

そして筆者は「能楽」だけでなく他の「邦楽」の上演や教習の実態をも総合的に考察してみたいと考えるようになり、資料収集に着手したのである。後述することとなるが、内地と同様に専門月刊紙も一部発見することができたが、それ以外には芸能情報を知る活字メディアとしては、日本語による日刊新聞が大きな役割を果たしているのではないかと推定し、調査を実施している。2010 年 11 月からは共同研究プロジェクトが始動し、研究成果を上げるべく海外の研究者の協力も仰ぎながら研究を進めている。

本稿では、筆者が個人研究として進めてきた調査研究成果として、すでに関連学会での口頭発表で報告してきた研究結果の一部について言及する[1)]。昭和 10 年 6 月から 8 月にかけての大連市で挙行された歌舞伎、文楽、能楽の公演を事例に、1）公演予告および公演についてどのように報道されていたか、2）どのようなパフォーマーが、どのような場で上演していたのか、3）どのような人々が関心をもっていたか、あるいは学んでいたか、という点に焦点をしぼり、一般日刊新聞では、株式会社南満州鉄道系列の『満洲日報』『満洲日日新聞』『大連新聞』、そして能楽専門月刊新聞『満鮮謡曲界』収載記事をベースに分析、考察を行う。

1　市村羽左衛門一行による歌舞伎公演について

市村羽左衛門率いる歌舞伎の本格的移動公演は、昭和 10 年 6 月 25 日に大連入りし、7 月 1 日に奉天に向かった。大連での公演に関しては現在までに、『満洲日報』では、6 月 17 日（第 10488 号）、18 日（第 10489 号）、25 日（第 10496 号）、28 日（第 10499 号）、29 日（第 10500 号）、7 月 2 日（第 10503 号）に関連記事を見いだせた。

6 月 17 日の紙面では、下記記事に見るように、本公演前に旅順、大連駐在の軍人、警察官及び『満洲日報』愛読者を対象として招待公演が行われている（記事①）。

＜記事①＞

旅大在住　軍人、讀者招待　〝羽左〟一行演藝會

二十五日夕協和會館にて

名優市村羽左衛門丈は今回駐滿皇軍慰問の目的を以て片岡我童丈、市村龜藏丈外一門百二十名を率ゐて來る二十五日大連入港定期船で來滿、大連においては二十六日より五日間協和會館に於いて一般公演を行ふが、本社はこの公演に先だち着連當日特に協和會館に招聘して、旅大駐在帝國軍人、同警察官並に本紙愛讀者（希望者の中より抽籤にて入場者を定む）招待して演藝會を開催することゝなつた、當日のプログラム及び愛讀者申込規定は左の如くである【寫眞】上から羽左衛門、我童、龜藏、家橘、芦燕丈

△期日　二十五日午後七時より

△場所　滿鐵協和會館

プログラム

一、挨拶	市村羽左衛門
一、挨拶	片岡　我童
一、舞踊「浦島」	市村　龜藏
	市村　家橘
一、所作事「二人道成寺」	片岡　芦燕

外二十餘名、長唄囃子連中

申込み方法　十七日發行夕刊（十八日附）第三面刷込み參加申込み讀者券に官製はがき一枚を添へ郵便にて本社事業部宛申込むこと、但し官製はがきは返信用につき必ず各自の住所氏名を記入すること、若し記入なきものは無効とす

締切　二十日午後四時まで本社事業部着のものに限る

通知　定員超過の場合は二十一日抽籤により決定、當籤者に對する通知は即日發送す

六月十六日　滿洲日報社

（『滿洲日報』昭和10（1935）年
6月17日　第10488号、第2面、第7面）

〻羽左、一行演藝會
讀者申込券｛一人一枚｝
二十日午後四時締切
主催　滿洲日報社

（『滿洲日報』昭和10（1935）年
6月18日　第10489号、第3面）

翌日には、本公演の演目、配役などの詳細が掲載された（記事②）。

＜記事②＞

羽左衛門一行の　來滿せまる　極めつけの絶品を揃へた　御目見得狂言の内容

梨園の第一人者羽左衛門一行の來滿いよいよ迫つて今や全滿的に待望され、物凄い前人氣を呼んでゐるが、滿洲初御目見得と夏とはいへまだ左程暑いといふ程でもない觀劇シーズンに公演の際は未曾有の盛況を呈するものと見られてゐる、御目見得狂言出し物は既報の如く

第一「だんまり」第二「近江源氏先陣館」第三「椀屋九兵衛」第四「勸進帳」第五「與話情浮名横櫛」第六「二人道成寺」

で何れも羽左、我童極め附けの絶品揃ひであるが、其主なる配役は

▲羽左衛門（四役）向庇の與三郎、天明夜叉太郎、佐々木三郎兵衛盛綱、武藏坊辨慶
▲龜藏（四役）蝙蝠の安五郎、信樂太郎、備前の惣八、吉田主馬正勝
▲芦燕（三役）九兵衛女房お松、大伴鬼女妻琴姫、白拍子櫻子
▲義直（四役）太刀持、鸚鵡の吉兵衛、稚兒花若丸、信念坊
▲村右衛門（四役）丹波屋卜齋、吉川監物、和田兵衛秀盛、常盤坊海尊
▲家橘（五役）丹波屋梅ヶ枝、青柳常盤之助、白拍子花子、高綱妻篝火、源義經
▲我童（五役）椀屋久兵衛、大伴宗藏實は二荒岩五郎、盛綱母微妙、お富、富樫左衛門

以上の如く適材適所、好劇家の興味をそゝるに十分だらう、なほ一行同伴の長唄連中は芳村伊久四郎社中で其連名左の如くであり流石に東京大歌舞伎らしい陣容である

▲長唄芳村伊久四郎、松永和郁郎、中村六之助、芳村伊助、富士田清次▲三味線杵屋榮美三郎、定次郎、正四郎、定三郎、勉之助▲笛望月仙十郎▲小鼓田中佐十郎▲小つゝみ田中傳佐久▲大鼓田中傳次▲太鼓六郷吉兵衛、田中佐七郎（寫眞は羽左の辨慶）

（『滿洲日報』昭和10（1935）年
6月18日　第10489号第2面）

6月29日の記事では、「映画と演芸」欄に、二の替りの演目と配役、連日大入り満員であることが言及されている（記事③）。

＜記事③＞

映画と演藝　羽左衛門一行　けふから二の替り

「石切り梶原」や「先代萩」　呼び物は「辨天小僧」

協和會館にて好評連日大入り滿員の市村羽左衛門一行東京大歌舞伎は本日より二の替り狂言に入るが出しものは

▽第一伽羅先代萩　花水橋の場、政岡忠節の場、竹本連中
▽第二名橘譽石切　鶴ヶ岡社頭の場　竹本連中
▽第三清水一角　河竹黙阿彌作、吉良家中牧山宅の場、同清水一角宅の場
▽第四根元草摺引　所作事、長唄囃子連中
▽第五辨天娘女男白浪　河竹黙阿彌作、雪の下濱松屋の場、綾瀬川勢揃ひの場

なほ右狂言における主なる配役は左の如し【寫眞は羽左の梶原景時】

▲羽左衛門（梶原平三景時、清水一角、辨天小僧菊之助）
▲我童（乳人政岡、大庭三郎景親、一角姉お巻、日本駄右衛門）
▲龜藏（彈正妹八汐、俣野五郎景久、南郷力丸）
▲家橘（娘梢、弟與一郎、曾我五郎時政、忠信利平）
▲芦燕（足利左金吾頼兼、嘉村奥方沖の井、遊君舞鶴、赤星十三郎）

（『滿洲日報』昭和10（1935）年
6月29日　第10500号、第5面）

これらの記事からもわかるように、集客を目的とした予告と報告をうまく連携させ、一般人

への報道がなされている。そして江戸歌舞伎の名優を迎えて、賑わっている様子も看守でき、また、この軍事慰問公演という大きな時代思潮にのまれつつも、日々の娯楽の対象として伝統芸能が息づいていたことが伺える[2)]。

2　竹本津太夫らによる文楽公演について

市村羽左衛門一行の歌舞伎公演の興奮がさめやらぬ大連で 7 月下旬に竹本津太夫率いる文楽公演が行われた。この公演は、大連新聞社主催によるもので、同新聞には 7 月 7 日から 10、11、14、15、16、17、18、19、21、23、24 日と次々と広報記事が打たれている。

演目、出演者ばかりでなく切符購入について詳細な記事が 7 月 10 日に掲載された。下記記事にも示されているように百貨店や楽器店、大連劇場、検番、各所で切符の取りつぎが行われている。料金も特等席は 5 円、そして学生席は 30 銭に設定され、指定席となっている。幅広い観客を想定した料金設定となっていることも興味深い。そして記事の見出しにもあるように、文楽に対して「国宝」という表現がとられている（記事④）。

＜記事④＞

國寶文樂　人形淨瑠璃芝居

全滿の待望集めて　廿三日に來連　津太夫、綱造、文五郎の名トリオに、幹部、新進花形五十數名の大一座　廿四日から〝大劇〟開演

文部省推奨の國寶大藝術、世界へ誇る文樂人形淨瑠璃芝居大一座が在滿皇軍慰問の傍我が同胞慰安公演のため七月二十三日海路來連翌二十四日より向ふ五日間に亘り大連劇場で開演することは既報の通りであるが、渡滿メンバーは左記幹部三十名の外に新進若手花形二十數名を加えた大一座が大擧來連することに決定した

淨瑠璃　竹本津太夫、竹本相生太夫、豊竹呂太夫、豊竹つばめ太夫、竹本小春太夫、竹本陸路太夫、竹本津の子太夫、豊竹辰太夫、竹本隅榮太夫　他數名

三味線　鶴澤綱造、竹澤團六、鶴澤友右衛門、鶴澤重造、鶴澤清二郎、豊澤猿糸、豊澤綱次、竹澤團二郎、他數名

人形　吉田文五郎、桐竹紋十郎、吉田玉造、桐竹門造、吉田玉幸、吉田扇太郎、吉田文作、吉田光之助、吉田榮三郎、桐竹紋太郎、吉田玉市、他數名

文樂座空前絶後の此の壯擧は滿洲藝界稀有の収穫として今や全滿的に異常な衝動をあたへ、大連は勿論のこと沿線各地至る所に待望憧憬の聲が充ち滿ちてゐるが、文樂ファン及び一般同胞の文樂渡滿公演を期待する興味の焦點は、等しく竹本津太夫（淨瑠璃代表）鶴澤綱造（三味線代表）吉田文五郎（人形代表）の三巨匠によつて結成された名人トリオの生む神技絶品への憧れと陶酔で、三部門一體となつて舞臺に生れる文樂人形淨瑠璃芝居の精華は無條件で觀客、聽衆を恍惚境に誘ふであらう、因に文樂一行のお目見得及び二の替り藝題は左の如くである

お目見得藝題

一、假名手本忠臣藏（道行旅路の嫁入り）

二、艶容女舞衣（酒屋の段）

三、壽式三番叟

四、菅原傳授手習鑑（寺子屋の段）

五、三勇士名譽の肉彈

二の替り藝題

一、牛寫朝顔日記（宿屋の段大井川の段）

二、伽羅先代萩（御殿の段）

三、安宅の關（勸進帳の段）

四、攝中合邦ケ辻（合邦住家の段）

五、三勇士名譽の肉彈

觀覽券の前賣開始　大劇内部大改造

近く文樂人形淨瑠璃芝居大一座の來演を迎へんとする大連劇場では場内数百疊の疊を全部入れ替へると同時に舞臺、觀客席及び樂屋等々場内諸設備に大改造を施し新装を凝らすことになつた、觀客席は座席番號入りのマスをつくり、指定座席の豫約を取扱つて觀客の便宜を圖るべく觀覽券は九日より市内左記五箇所で前賣りを開始したが、特等五圓、一等三圓五十錢、二等二圓、指定座席券交換は大連劇場に於て十日より取扱はれるとのことである

三越（電二一四一八一）

幾久屋（電二一六一〇一）
山葉洋行（電二一四一四八）
大　　檢（電二一四五〇六）
大連劇場（電二一六四三八、三九三八）

（『大連新聞』昭和10（1935）年7月10日　第5442号、第2面）

本公演そのものの広報記事だけでなく、関連イヴェントである畿久屋百貨店で開催された文楽人形と故初代雁次郎の衣裳の展覧が、同新聞社主催によって開催され、その広報記事も詳細に掲載されている（記事⑤）。

＜記事⑤＞

文樂公演前奏　本社が歌舞伎と文樂の愛好家に贈る　文樂人形と故雁次郎を　偲ぶ舞台衣裳展覽會　十六日から一週間にわたり幾久屋百貨店で

既に東京大歌舞伎市村羽左衛門一座の來演あり、近く國寶〝文樂〟人形淨瑠璃芝居大一座が來演せんとし、大連を始めとし全滿的に古典藝術の香り高き近松イズムが氾濫しつゝであるが、このときにあたり、我が大連新聞社は歌舞伎並に〝文樂〟愛好家各位のため、七月十六日より二十一日まで一週間に亘り、畿久屋百貨店三階ギャラリーに於て文樂〝人形と逝ける名優故中村雁次郎を偲ぶ舞臺衣裳展覽會〟を主催して汎く全大連市民へ公開することになつた、文樂人形の出品種類、その他詳細は追つて發表されるが、出品決定せる故雁次郎愛用の舞台衣裳は左の如くいづれも松竹興行會社秘蔵のものばかりである

▲土屋主税（忠臣蔵）▲佐々木盛綱（近江源氏先陣館八ツ目）▲熊谷直實（照屋陣屋）▲三浦之助（鎌倉三代記）▲菊屋伊左衛門（郭文章）▲春藤治郎左衛門（大晏寺堤）▲藤十郎（藤十郎の戀）▲大石内藏之助（忠臣藏山科閑居）▲吃の叉平（傾城反魂香）▲梶原平三景時（石切梶原）▲南方十次兵衛（引窓）▲紙屋治兵衛（紙治炬燵）▲同（紙治河庄）▲龜屋忠兵衛（戀飛脚大和待來封印切の場）▲半七（茜染）▲八百屋半兵衛（心中宵庚申）

此の外に、雁次郎の遺族秘藏の故人（雁次郎）舞台寫眞その他八十數點が陳列され錦上さらに花を添へるが、文樂人形は果して何が出品されるか、來る二十四日より大連劇場で開演する文樂人形淨瑠璃芝居の前奏曲として歌舞伎並に文樂人形淨瑠璃ファンの間に待望されてゐる（カット　雁次郎）

日本娘人形を皇帝に献上

【新京十三日發國通】松竹経營大阪文樂座人形芝居は演藝に依る日滿交驩在滿軍隊慰問の使命を帯び近く同座主任大塚良三氏に引率され來滿するが同座では新京訪問の際見事な人形日本娘を皇帝陛下に献上の由である

大塚主任門司を發つ【門司特電十三日發】

日本が誇りを持つ傳統の華、人形淨瑠璃が愈々滿洲へ初めて海外興業に出ようといふお膳立を終へ左記の如き出場其の他決定案を齎して松竹の文樂座主任大塚良三氏は十三日門司發はるぴん丸で渡滿した氏は一座が携行する滿洲國皇帝への献上品と同形の人形を船室に飾つてゐるが滿鐵へ寄贈のものであると

▲第一回藝題
假名手本忠臣藏（道行旅路の嫁入）艶容女舞衣（酒屋の段）壽式三番叟（菅原傳授手習鑑（寺子屋の段）三勇士譽の肉彈

▲第二回
生寫朝顔日記（宿屋の段　大井川の段）伽羅先代萩（御殿の段）攝洲合邦ケ辻（合邦住家の段）、勸進帳、三勇士譽の肉彈

▲太夫、竹本津太夫、竹本相生太夫、豊竹呂太夫、豊竹つばめ太夫、竹本小春太夫、竹本源路太夫、豊竹辰太夫、竹本幡路太夫、竹本津子太夫

▲三味線、鶴澤綱造、同芳之助、重藏、友右衛門、友三郎、綱次、豊澤猿糸、竹澤團三郎

▲人形遣ひ、吉田文五郎、桐竹紋十郎外二十數名

（『大連新聞』昭和10（1935）年7月14日　第5446号、第11面）

文楽公演報道に関しては、上記のように公演に先立ち文楽人形の展覧の様子も含め、連日に近く記事が見いだされ、同社主催行事であるも

のの、一般読者への積極的な広報戦略が読み取れる。

3　宝生流宗家率いる能楽公演

本稿第 1 章、2 章で見てきた歌舞伎、文楽公演についての報道記事に共通することは、それらの公演が原則在満洲軍人、警察関係の慰問公演として位置づけられ、既存の劇場や会館で上演されていることである。一方、本章で見る能楽公演に関しては、本公演のために能楽殿が新築されたのである [3)]。後述することとなるが、大連では、『滿鮮謠曲界』（昭和 8 年創刊）という専門の月刊新聞も刊行されており、能楽関係者の内側にすでに組織体として、能楽をサポートする環境が成立していたと考えられる。勿論、そこには私財を投じて熱心に大連能楽界を牽引していた森川荘吉およびそれを支える財界人、そして流派を越えて一体となって能楽振興に寄与した人物のネットワークが大きな力となっていると見られる。能楽界外からの依頼で移動公演が行われるだけではなく、能楽界内部からの力が大きく働いているとみてよい [4)]。従って、能楽公演に関しては、一般新聞と専門新聞の記事両方を分析対象とする。

舞台披きとしての宝生流宗家の移動公演となり、一般日刊新聞、専門月刊新聞でも公演内容だけでなく、能楽堂建設に関する記事も多く見いだされる。よって本稿では、公演内容と能楽殿に関する記事について両種の報道に分けて整理しておく。

3－1　一般新聞にみる大連能楽殿関連記事

一般日刊新聞でも能楽殿に関する記事が取りあげられている。『滿洲日報』（6 月 18 日、第 10489 号）そして既述の文楽公演を主催した『大連新聞』（6 月 13 日、第 5415 号）では、6 月 17 日の上棟式の様子も報道している。両紙とも大正 11 年に建造された能楽堂との関係、そして新能楽殿建造をサポートした人物にも言及されている。本稿では『大連新聞』の記事を下記に引用しておく（記事⑥）。

＜記事⑥＞

愈よ面目を改める大連の能舞臺、六百人収客‥‥十七日上棟式　八月盛んな舞臺開き更正・國粋藝術

非常時局の反影として國粋藝術の勃興が叫ばれてゐる折柄、近代的時潮に稍もすれば押し流され勝ちだつた日本古來の古典藝術、能樂の熱心な研究者として努力して來た大連機械製作所専務取締役森川莊吉氏が都市計畫の爲め立退きを命せられ破壊を餘儀なくされてゐた大連中央公園内大連能樂會の能舞臺が大連能樂界から經費の關係で姿を消すのを嘆き敢然獨力を以つて私財一萬餘圓を投じて之を大連市光明臺産靈教會境内に移し保管するとの報が去る三月本紙に依り報道されるや國粋愛好者間に異常な反響を投げかけ特産商瓜谷長造氏及び高岡組主高岡又二郎氏を初め能樂各流團體からも之が援助方を申し出る者も現はれその後能舞臺の移轉は着々と進められ愈々來る十七日午後四時半から同好の士百餘名を招待し盛大な上棟式を擧行する運びにまで進捗した、舊能舞臺は相當破損ケ所がありその殆んどが新築されたと同様で觀衆席は六百餘人の収容力を持つて居り從來、舞臺が無い爲め料理店やホテルを利用してゐた謠曲界にとつて大いに寄與するものがあらう森川氏は之を機會に落成式を兼ねて舞臺開きを行ふべく計畫を進めて居り寶生流家元、寶生重英及び寶生新の兩大家を招聘來る八月十七、八の兩日に亘り能會を開催、古典樂の皷吹を圖ることゝなつた

（『大連新聞』昭和 10 年（1935）年 6 月 13 日　第 5415 号　第 7 面）

また、竣工の記事については、『滿洲日日新聞』（8 月 9 日）に大きな記事が掲載されている（記事⑦）。

＜記事⑦＞

古典藝術の香ゆかしく　能樂殿の復興、八日、落成祭が行はれた　海外唯一の舞臺

光明臺産靈教會敷地内に建造された大連能樂殿は八日午後二時落成祭式を執行し四時より六時まで同好の士に内部を開放して觀覧に供し

た、森川莊吉氏が唯一の趣味により能樂發展の心願から殆ど獨力にて作り上げたものであるが來賓に案内しながら諸氏の倶樂部として愛護して頂きたいと陳べてゐた、此能樂舞臺は元は西公園内に大正十〔十一〕年明治神宮御造營を奉祝する為めに有志によりて建築されたのであるが、見所がなくて不便な爲め多く利用されず殆ど立腐れの状態になって居たのを、かねて日本精神作興の意味から古典藝術たる謠曲能樂の發展向上に心血を注いでゐる森川氏が引受けて復興することゝなり、偶々市の都市計畫の都合上立退かせなければならなくなったので産靈教會の松山氏の賛助を得てその境内に移轉することになったものである、移轉とは云ふも腐朽せる箇所大部を占めてゐるから臺彎より檜材を取り寄せて舞臺其他に新材を用ひ、殊に見所を新築したから全部新築に異ならぬ、何しろ滿洲ばかりでなく海外における唯一の本式能樂堂である點大に誇りとなすべきである、從來能樂堂なきに困つてゐた滿洲の斯界においては大に便宜を得るわけである、謠曲の小會なども此處で出來る、此の總坪数は百五十七坪五八、舞臺四十六坪三二、見所百十一坪二六で觀客五百名を容れ得る、詰めれば六百名、建築費二萬五千圓を要し地鎮祭五月二日、上棟式六月十七日、竣工八月八日、來る十七、十八兩日に亘りて折能く來滿の寶生重英、寶生新兩宗家によりて舞臺披きが行はれる鏡板の松竹は原田恕堂氏の謁く所、繪具料だけ三百圓かゝつたといふ（写眞は大連能樂殿の舞臺）

舞臺開きには　　秘傳の“三番叟”　寶生宗家一行渡滿の途へ

【大坂特電八日發】滿支訪問の能樂使節寶生流宗家寶生重英、寶生新氏等は途中京都で狂言師茂山忠三郎氏を加へ更に大阪驛で辰巳孝一郎氏等と落合ひ、一行二十四名賑やかな見送りを受けつゝ八日夜十時七分陸路元氣で出發した、下關で更に一名参加のはずである、大藏流の家元茂山忠三郎氏は出發に先立ち

能樂を滿支人に紹介すると共に皇軍將士慰問する事の出來るのは非常に喜んでゐる、殊に東京の寶生、ワキ寶生の家元と相共に壯途に上るのは斯道の爲めに愉快です、大連能樂殿の舞臺開きに出演の三番叟は全くの秘傳もので精進齋戒して最も莊重に演ずるものです

と語つた

（『滿州日日新聞』昭和10（1935）年8月9日　第10541号　第9面）

上記記事では、「海外唯一の舞台」という見出しの文字が見られる。大連に居住する日本人にとって「伝統芸術」を専門に上演する建造物としての意義を認め、かつ内地以外の地に建造できたことへの意義を前面に打ち出していることも興味深い。また上記記事にもみられる様に、最大600名収容できるものであるが、同舞台披きを記念して発行された葉書には建物の外観、建物内部の写真も含まれ、内地の能楽堂にひけを取らないものとなっていることが看取できる[5)]。

また、舞台披きの公演は、能楽関係者を中心にチケット販売が行われている様子が以下の『滿洲日日新聞』(8月13日）記事よりわかる（記事⑧。

＜記事⑧＞

大連能楽殿披き寶生流能會迫る〳〵両宗家打ち揃って來連し　斯道の精華を披露

寶生流両宗家の演能會はいよいよ十七、十八の両日開催されることとなり、主催者たる、一樹、寶雲、梧葉、大連寶生、一河の各會は準備に忙殺されてゐるが、今回の演能會は兩宗家打ち揃つての來連で有るのみならず、海外唯一の能舞臺たる大連能樂殿の舞臺披きを兼ねる意義深いもので、演奏曲も凡て斯道代表的精華を連ねた未曾有の催しである、滿州能界に特筆されるべきものであるが、残念にも會場の収容力に僅かに五百人希望者全部の収容は全く不可能であるが、會費は二日間辨當つきにて十圓、辨當不要の場合は九圓である、會員券の購入は各流派師範各會幹事を通じて申し込むか、或ひは市内京町一二六森川莊吉氏方寶生流觀能會催能事務所（電話四一九〇六四）に申込まれたいと

（『滿州日日新聞』昭和 10（1935）年
8 月 13 日　第 10545 号　第 3 面）

上記引用記事からもわかるように、能楽界外で発行されている一般新聞にも大々的な広報記事が掲載され、ひろく一般人にも能楽殿および宝生流宗家一行による舞台披き公演が行われることが、情報としてながされていたことは、興味深い史実である。

3－2　専門紙にみる舞台披き及び上演内容に関する記事

本節では、大連市で刊行されていた『滿鮮謠曲界』に掲載された記事をもとに、能楽殿および宝生流宗家一行移動公演について見ておく。

関連記事はすでに 4 月の第 23 号第 2 面に、能楽殿建設が正式にきまったことが言及されている。次に続く第 24 号では、舞台開き公演予定者を含めた下記記事が見られる（記事⑨）。

＜記事⑨＞

寶生流宗家の來滿確定　脇寶生の宗家寶生新氏も來滿八月十七八日兩日大連にて演能

既報の如く本年夏季には東都より寶生流宗家寶生重英氏及び下懸り寶生の宗家寶生新氏が遙々渡滿されその妙技を公開さるゝことゝなつた、それがため下準備のためとして去月下旬大阪の辰巳孝一郎氏が來連され、瓜谷森川兩氏を始め各關係者と打合せを行はれた。

一行の顔觸れとして今日までに決定してゐる諸氏は左の如くである。

（シテ方）寶生重英氏、同英雄氏、高橋進氏、佐野巌氏、野村諭氏、三田清氏、林弘氏、辰巳孝一郎氏、同孝氏、同清氏
（ワキ方）寶生新氏、松本謙三氏、光本彌一氏
（笛　方）藤田大五郎氏＝一噌流＝、貞光義次氏＝森田流＝
（小　鼓）住駒政次氏外一名＝幸流＝
（大　鼓）龜井俊雄氏、瀬尾乃武氏＝葛野流＝
（太　鼓）前川光隆氏＝金春流＝
（狂言方）茂山忠三郎氏、同良介氏、外一名＝大藏流＝

右の如くで前號に報じた一噌、幸、金春、川崎の諸氏（各流宗家及び宗家代理）の來滿は噂に止まったのかと思ふと甚だしく遺憾に思はれる點もあるが素より以上の囃子方諸氏は立派な腕利揃ひであるから、この滿洲の土地に在って之以上を望むことは贅澤の限りであらう、辰巳氏の言にも「囃子方を各宗家に依頼するならばそれぞれ供人も要し人數の點に於ても膨大となり内地の如く一人一役等といふ贅澤な能は不可能に付一人で何番をも勤め得る若手の腕利を撰ぶことにしました」とあったが他流の人々の思惑もあり旁々せめて幸、金春の兩氏位ゐは未だ壯年の人ではありこの一行に加へて欲しいものと思はれもする。

然して一行は八月上旬東京を出立先づ京城に於て演奏をなし、また奉天に於ても素謠若くは演能を催し同十五日來連し十七、十八の兩日當地に於て演能會を催されることに決定した、兩日の番組は目下詮衡中であるが、翁、安宅、石橋なども豫定の中に考慮されて居る由で何れにしても未會有の大會となるべきこと勿論である、會場はそれ迄に竣成すれば前報の如く産靈教會地域内の能樂堂で行はれる筈である。

（『滿鮮謠曲界』昭和 10（1935）年
5 月号　第 24 号　第 2 面）

さらに第 25 号では、演目決定したことが報じられている（記事⑩）。

＜記事⑩＞

〔前略〕

初日（午前九時より）
翁　辰巳孝一郎　面箱　茂山良介、千歳　辰巳孝、三番　茂山忠三郎
小鍛冶　寶生英雄、ワキ　松本謙三
羽衣　佐野巌、ワキ　光本彌一
隅田川　寶生重英、ワキ　寶生新
望月　寶生重英、ワキ　寶生新
二日目（午後四時より）
熊坂　高橋進、ワキ　光本彌一
安宅　寶生重英、ワキ　寶生新
熊野　辰巳孝一郎　ワキ　寶生新
亂　寶生重英、寶生英雄、ワキ　松本謙三

右の如き豪華番組で、斯かる大能が滿洲に在

つて居ながら見物し得るといふことは全く未會有の次第で、流儀を云爲する性質のものではない各流の愛謠家は擧つて參觀すべきである、またこの會券も東京に在ると同樣一日五圓の低額であるが今回は兩日を通じての會員に非ざれば受付けぬ方針ださうで即ち會券は一葉十圓となる譯である、或は見所の出來上つた上の具合に依て内地の如く正面の會券と脇正面その他多少見にくき席の會券とに甲乙を附せねばならぬことになるかも知れないが、大體に於て右の如く決定されて居る。

（『滿鮮謠曲界』昭和10（1935）年6月号　第25号　第2面）

料金設定も内地と同樣の金額に設定している。さらに第26号では、大連以外の公演日程が公開されている。同移動公演では、青島、上海が含まれており、すでに能楽が第二次世界大戦以前に海外公演を行っていたと判断できる貴重な資料となっている（記事⑪）[6]。

＜記事⑪＞

寶生流宗家一行の鮮滿支各地演奏日取並番組

屢々所報の如く寶生宗家寶生重英氏一門、同脇寶生宗家寶生新氏一門及び東京、京都、大阪、三都より撰抜された一噲、森田兩流の笛方、幸流小鼓、葛野、大倉兩流の大鼓、金春流太鼓の各囃子方、大藏流狂言の名手茂山忠三郎氏の一門合せて二十五名の能樂家が打揃つて京城を振出しに、京城は八月十一日、新京は同十三日、奉天は十四日大連は十七、十八の兩日、青島は二十三日、上海は二十七日といふ順序に能樂（奉天は素謠及囃子）の演奏旅行をさるゝことゝなった、各地の番組は左の如くである。

△**京城**　日時　八月十一日正午始　會場　長谷川町公會堂舞臺　主催　京城寶生會　小鍛冶、安宅、葵上、望月　『狂言』　昆布賣、伯母ケ酒

△**新京**　日時　八月十三日午後五時始　會場　新京記念公會堂　主催　寶生重英

小鍛冶、羽衣、望月『仕舞』山蛯、八島、小歌、殺生石、笠之段、野守『狂言』　寢音曲

△**奉天**　日時　八月十四日午後五時始　會場　奉天ヤマトホテル舞臺　主催　奉天梧葉會、寶生會　素謠　井筒、鉢木　舞囃子　養老　草紙洗　船辨慶『仕舞』春日龍神、八島、綱之段、殺生石、岩船『狂言』不聞座頭

△**大連**　日時　八月十七日午後四時　十八日午前十時始、會場　光明臺新築大連能樂殿　主催　一樹、寶雲、梧葉、寶生、一河各會

［初日］　翁　熊坂、安宅、『仕舞』八島、網之段、女郎花、鵜之段、岩船　葵上　亂『狂言』寢音曲　安宅間　二九十八

二日目　翁　小鍛冶　羽衣『仕舞』春日龍神、田村、小歌、笠之段、野守　隅田川　望月『狂言』末廣　不聞座頭　望月間

△**青嶋**（ママ）　日時　八月二十三日午後五時始　會場　青島第一小學校講堂　主催　青島寶生會　小鍛冶　安宅　葵上　望月『狂言』昆布賣　伯母ケ酒

△**上海**　日時　八月二十七日午後五時、二十八日午後六時始、會場　新亞細亞ホテル舞臺　主催　上海寶生會

［初日］翁　小鍛冶、隅田川、羽衣、望月、『狂言』昆布賣、伯母ケ酒

二日目熊坂、安宅、葵上、亂『狂言』寢音曲　不聞座頭

以上の如くで各地共異常の期待を以てこの未會有の演能會を一日千秋の思ひで待ちつゝある、大連へは十五日は到着の豫定であったが十五日は無順見物をなし、十六日早朝着に決定した、而して演能終了後二日間を休息して諸所の見物をされ二十一日離連青嶋（ママ）に向はることとなつた姑めの豫定は青嶋（ママ）二十一日上海二十五、六日であったが上記の如く變更されたものである。［以上出演者は省略］

（『滿鮮謠曲界』昭和10（1935）年8月号　第26号　第2面）

また同号には宗家寶生重英のメッセージなどの記事も掲載されている（記事⑫）。

＜記事⑫＞

滿鮮支各地の愛能家諸賢へ　東京にて　寶生重英

能樂を海外へ紹介したいと云ふことは永年の宿望でございましが、何分謠曲だけの催しと違

ひましてシテ方ワキ師、囃子方、狂言と人數の點に於ても大掛りであり、面、裝束、小道具の類までも持運びをいたさねばなりませんので容易には行はれないことゝして其儘に月日が流れて居りましたところ、昨年から愈々お約束も本極りになりかけまして、とうとう本春に到り確實なお約束が整ひ、瞬く間に憧がれの滿朝鮮支を訪問すべき日が近寄って參りました。

今回私がこの演奏旅行を決意いたしましたことは決して自流の振興とか發展とか申すやうな小さな目的の爲ではございません、抑も能樂謠曲が日本の國粋であるとか眞の古典藝術であると云ふことは一部の人々には慥かに認識されて居りませうが、未だ大部分の人々が爾く認識しては居りません、能樂よりも後に生れ而も能樂に基礎を置いて出來上つた歌舞伎座とか人形浄瑠璃等を以て唯一の國粋藝術であるかの如く思考されて居る人々が多いやうに存じます、それは從來能樂の道が餘りに世間といふものと隔たりがあり過ぎた結果ではなかったかと存じます。

然るにこの二三年以來非常時とか昭和維新とかいふ文辭の提唱に依りまして日本精神の再認識が叫ばれ、他の演藝に比すればずっと簡素でありながら無限の精神的奥深い味を有つ所の能樂が、却て一般大衆の上にも關心をもたるゝることゝなり、殊に學生諸子の謠曲熱、能樂熱は意想外に旺盛を極めるやうになりました、これは眞の日本精神が玆に顯現されたものとして欣快に堪えない次第でございます。

日本内地でさへも近時漸く斯くの次第でありますから、況して海外に存住され殊に海外で生れた方々などにとりましては、能樂といふものが如何なるものであるかをさへ御存じない方があるんぢやないかと存じますにつけ、此際決して流儀の問題ではございません、どうにかして日本の能樂を廣く海外にまで紹介したい、そして日本の古典藝術を知って戴き、日本の眞の傳統的姿を認識して頂きたいと常々抱懐してゐましたことが今回流儀の人々の熱心な御斡旋に依つて實現さるうゝに至つたのでございます。

日滿關係は日と共に、緊密を加へ、今春は畏くも滿洲國皇帝陛下の御訪日を仰ぐなど兩國の親善は彌が上にも重なりつゝある時に方り、私共は私共の道をもつて微力ながら一層この親善を強固ならしめたいとの念願を持ちまして遙々滿洲を第一の目的地として參上いたすことゝなりましたに就ては流儀を問はず一般の斯道愛好家諸士と特別の御賛同と御尽盡力を賜はり私共のこの行を恙なく終始させて戴きたいとそればかりを願って居ります。

この旅の演奏旅行に就きましては徳川家達公、松平頼壽伯、安田善次郎氏等はとり分け御喜び下さいまして種々激勵のお言葉も戴き、満鮮地方は嘗て一度纂參つたこともありお馴染の方もございますが青島、上海等は全く始めてのことでもございますので能樂協會の會頭たる松平伯爵の御名を以て御紹介の御挨拶狀をそれぞれ御出狀下すつたと承はりました。

又今回の旅行に就て私共は一つの期待と申しませうか希望と申しませうか深い興味をもつて一日も早く接して見たいと考へて居りますことは彼の支那劇でございます、或學者の説に依りますと能は支那の元曲から來たものだという説もございますので、成程支那劇は能と一致した點があるやうに思はれますので今度の旅行には是非親しく見物も致し、説明も承はりまして何か私共の身にとり、稗益するところがありはしないかとそれをも樂しんで居ります。

滿鮮謠曲界紙を通じ皆樣の御健康を祈ると同時に酷暑の砌御來觀下さいます方々及び御斡旋下さいます方々に只今より厚く御禮を申し上げて置きたいと存じます。

來演名師の俤

すべてが豫定通り運はれるといふ事ほど目出度い事はあるまい、嘗て本紙にも『入れ物』か『中身』かといふ事を愛謠家の座談會記事として掲載したことがあった、斯道の振興策として先づ第一に入れ物（舞臺）の建設を急ぐべきか、中身（藝）の養成を急ぐべきか、といふ事を論じられたのである、入れ物にしても、中身にしても、急速につくり上げるといふことは到底望む

べくもない事である、また何れが先に出來でも、一方に不足を告げる譯である、然るに今回森川氏の献身的努力に依つてそれこそ急速に『入れ物』が立派に出來上り『中身』は一時的とは云へ一流宗家が二人まで打揃ひ各流名手が多數打揃つて來演さるゝことゝなったのは、まるで夢のやうな心地がする。

この土地で翁や安宅望月亂の和合などといふものが坐ら見物出來るといふことは嘗て夢想だもしなかつたことである、斯ういふ『中身』は今後ともて矢鱈に見られる道理がない、如何に大連の土地に熱心家が多數にあったと云つても一度に萬金近くの費用を要する大能がさう易々行はれる筈がない、愛謠家諸氏は流儀に不拘萬難を排して見物すべきである。

茲に掲げた寫眞は第一が寶生新氏の「安宅」のワキ、第二が寶生重英氏の同じくシテ、第三が辰巳孝一郎氏である。［写真略］

（『滿鮮謠曲界』昭和10（1935）年8月号　第26号　第3面）

現地居住の師範、そして謠いなどを習っていた熱心な愛好家にとっても、ハードとソフト両面にわたって自らも関与し、能楽振興に携わっていたことに対しての犒いの言葉として受け止められよう。27号にはツアー全行程が成功裡に終了した記事も掲載されている。

昭和10年に実施された能楽海外ツアーは、日露戦争後、南満洲鉄道関係者を中心に始動したと推定される能楽振興の長い道程が実を結び花開いた大きな象徴のような出来事であったこととも理解できる。

次章では、これら歌舞伎、文楽、能の公演が実施された際、その場の聴衆がどのように「邦楽」を学んでいたか、どのような人々が関わっていたか、どのような娯楽環境が提供されていたかにについて簡単にみておきたい。

4　聴衆が「邦楽」を理解し、実践し、享受する環境はどのようなものであったか？

4－1　初心学習者にむけた配慮

「邦楽」はどのように学ぶことができたのであろうか。例えば、「謠」についても、前述の能楽専門紙にも情報提供のコーナーが設けられている。第22号に見られるように下記のような「紙上能楽学校」と題した記事がある（記事⑬）。

＜記事⑬＞

紙上能樂學校

課目

一年生（謠曲の初心者）

二年生（謠曲開始後三年程度）

三年生（仕舞及四拍子初歩）

四年生（舞囃子形及四拍子）

五年生（能樂形及同囃子其他）

〔一學年受持教師登壇〕＝

私は是が二回目の講義であります、前回には先づ謠を始むる人のためにその聲の出し方と、聲の扱ひ方を説明しました、皆さん覺えておいでゞせうね聲の出し方は率直に、電話を掛ける時のやうな心持ちと申し上げて置きました、聲の扱ひ方は見臺にある月と瓢箪の訓話を基として、八分の月（八分の息）、瓢のやうに下腹を充分に張り一度咽喉で締め更に聲袋に息を貯めて聲に綾（機）を作り口をしめて（しめてと云つてもふさぐ意味ではありません）出すといふやうなことをお教へして置きました。

聲の出し方、扱ひ方も大切でありますが、謠を始むるにあたりましては、先づ姿勢といふことが大事であります。謠をうたふのにあぐらをかいたり、膝を崩してゐたのでは決して眞當の謠が出來るものではありません、第一その道に對する心念から申しても嚴然と構へなければいけません。

座す時は兩股を雙方へ開き足の拇指（足に指といふことは申せませんが手に對しての假の名です）と拇指とを雙方から重ね、臀をしつかと其上にのせ體を眞直ぐに構へ臍で（臍を眼と假定して）疊を見るといふ心持ちになし、下腹に充分息を吸ひ込みます、丹田に力を入れるといふことは斯うして行はれるのです、左手は左膝中央に下向きにして力強く置き、右手は扇を持って右膝中央から稍前方に同じく下向に置きます、扇は能の地謠などに使ひます長いもの（一

尺一寸）と謠扇と稱して短かいもの（九寸）との二通〔三面に続く〕りありますが、この短かいものは略式のものでありましてほんとうは尺一のものを用うるに越したことはありません、短かい扇の場合はさうでもありませんが、長い扇を持つた人が、その扇の先を疊へ突きつけたり甚だしきは扇で引く節や廻す節を書くやうなことをしながら謳ふ人をよく見掛ますがあんな行儀の悪いことを見習ってはいけません、力を籠める所は兩肱にあるのでして手先は力強く膝に當て腹に餘裕をつくらしめねなければほんとうの謠はうたはれません、今私の云ったやうに構へて一度うたって御覽なさい、そして試みに兩手の力を落しうたってゐる際中に俄かに兩手を膝から離して御覽なさい、急に腹に自身の重味を感じませう、やって御覽なさい……そら適面におわかりでせう、體の構へやう一つで謠は完全に謳はれるものであります。

以上の事が解りましたら少し稽古をするに就ての作法を述べませう、謠を學ぶというふことは他の遊藝等を習ふのとは譯が違ひまして立派な武藝であり精神修養の心懸けを持って向はねばなりませんから其積りで眞執な態度で掛らねばいけません、先づ見臺に向ひ（見臺と膝の間は約一尺程度にあけます）一禮をして本を開きます、扇は要の方を右にして膝の前に置きます一句宛鸚鵡返しに教はる場合は直ちに扇を取り上げ構へますが、師匠が二枚なり三枚なりを謳ふやふになりましたら扇は膝の前へ置いた儘兩手は袴の中へ膝上に置て謹聽し師の謠が終つた時又一禮して兩手を直し扇を取り構へて謠ひ出します、途中で師から直されましたら勿論其場所を謠ひ直し、それまで宜しいと云はれる迄謠ひ直します、鉛筆で種々覺え書をすることなどは餘りよい覺え方ではありません、覺え書などを是非して置きたいと思ふ場合は稽古が濟んでからすべき事です、濟んだらば又一禮をします、之は師に對する禮でもあり道に對する禮でもあります。

（『滿鮮謠曲界』昭和 10（1935）年 3 月号　第 22 号　第 2、3 面）

謠を現地で習い始める人々にとっても、とても分かり易い解説となっている。もちろん内地ですでに経験の有る人にとっては、習いはじめた時を思い出し今ある自分の姿を見直すヒントにもなるものであろう。また、能楽以外の邦楽を学ぶ事の基本姿勢についての但し書きも、現代人で謠を習っているアマチュアの人々に関心を呼ぶところではないだろうか。

現地では謠や四つ拍子を習いたいと思う人にとって、どのような師範がいるかについても知りたい情報の一つである。まさに、本紙では流派をこえて朝鮮半島を含めた満洲全域の師範氏名、住所、稽古日一覧が記載された「滿鮮在住師範及師範代理住所氏名稽古日一覧表」が毎号連載されている。

次に十代の女学生にも鑑賞の機会が設けられていたことについて、一般新聞に見られる記事から引用しておきたい。和泉流狂言末広会による狂言の鑑賞会である（記事⑭記事⑮）。

＜記事⑭＞

羽衣高女生が　狂言觀覽

大連羽衣高女では和泉流狂言末廣會代表多々良外茂三氏社中の來連を機として右一行を招聘し、校友會主催の下に全校生徒のために二十九日午後一時半より同校講堂に於いて觀覽會を開催することゝなつたが、狂言曲目左の如し

▲水掛聟（舅多々良彦二、聟和田喜太郎、嫁上總正次）

▲隠し狸（太郎冠者多々良外茂三主人多々羅彦二）

▲法華僧和田喜太郎、念佛僧多々良外茂三、宿屋上總正次）

『滿洲日報』（昭和 10（1935）年 6 月 29 日　第 10500 号、第 5 面）

＜記事⑮＞

謠曲界の絶品　和泉流能狂言　本社及大連謠曲界有志後援で　廿日羽衣高女で公演

帝都能狂言界の権威者であり、和泉流能狂言で有名な末廣會主宰者多々良外茂三氏以下、令兄多々良彦二、和田喜太郎、上總正次四氏は在滿皇軍慰問の途次來連、末廣會多々良社中主催の

もとに三十日午後六時より大連羽衣高等女学校講堂に於て本社及び大連謠曲界有志後援を得て、和泉流能狂言を公演、本紙讀者並びに一般市民に公開することになった、和泉流狂言は、最も大衆に親しまれやすいもので謠曲を解せぬ一般人士にも是非觀賞を奨めたい絶品で、大連謠曲界近來の収穫である

多々良外茂三氏を主班とする末廣會多々良社中は、畏くも天覧及び台覧の光榮に浴せることあり、昭和三年十一月十二日、皇后陛下が東京音樂學校へ行啓の砌りに御臺覧を賜り同四年六月十五日華族會館五十週年記念日には同所で今上陛下の天覧を添ふせることとあり、和泉流能狂言の眞價は、あらゆる機會にあらゆる方法で裏づけられてゐる、今回の羽衣高女講堂に於ける公演に於ては、出し物が厳選され二人袴、悪太郎、縄なひ、三人片輪、蝸牛の五狂言が上演され、同流の在連土田他吉郎氏が特別賛助出演する

多々良外茂三、和田喜太郎、上總正次三氏は二十六日入港のばいかる丸、多々良彦二氏は二十七日入港のうすりい丸で相前後して來連し公演會を待機中であるが、末廣會多々良氏一行は大連放送局の懇望により二十八日午後八時三十分より、狂言『昆布賣』及び狂言謠（（イ）七ツ子（ロ）宇治の晒布（ハ）柳の下）をラヂオ放送する豫定である、因に羽衣高女公演會費は一圓であるが夕刊三面刷込みの本紙讀者割引券持參者及び藤原書店、天野翰墨林の前賣券利用者に限り七十錢に割引優待、学生三十錢である

（『大連新聞』（昭和10（1935）年6月28日　第5430号、第7面）

大連新聞社主催の公演会だけでなく、ラジオ放送にも出演することが記されており、大正末に登場した新しいメディアを介しての邦楽受容の一端を示すものでもある。本記事は狂言であるが、明治期から学校という場で邦楽の演奏が行われていたことを示す記事も散見でき、これらの資料からは、内地同様、若者のそばに「邦楽」が存在していたことを知ることができる。

4－2　大人が邦楽をたしなんでいることにどの程度の関心がもたれていたか

また、大人にとって「邦楽」にどれだけ関心が持たれていたかを示す資料も見いだせた。それは本稿第2章で言及した文楽への関心の高さを例証する記事である。既述したように竹本津太夫らが来連した記事にも見られたように文楽は多くの人に歓迎されていた。では、どのような人が実際に演奏をたしなみ、そしてその事に関心をもっていた人々がどの程度いたかを推定するデータともいえるのが、次に言及する連載記事である。それは大連新聞社が50日間に亘って連載した「素人義太夫」の人気投票に関するもので、大正11年2月21日（第592号第2面）から「素義總まくり」と題した記事の連載が始まり、冒頭に「大連の素人義太夫は實に明治三十九年頃から同好者に依り開始されてゐる、今日に至るまで多少の盛衰はあったが日に月に隆興して昨今の盛況を見てゐることは連中の熱心に依るものである」と記されている。

この人気投票は、投票期間3月1日より4月20日までで、区域は南北満洲全域である。朝刊第2面に投票用紙がすり込まれ、同時に連日投票結果が開示されている。4月21日（第644号、第2面）には、最終投票結果が掲載されている。1位は74296票獲得した濱屋天壽、2位は55408票獲得の白川白水、3位は54068票獲得の吉田表具、以下15位まで掲載され、その得票総数は307799票にのぼる。16位以下の票数が掲載されていないので、全投票総数は現在不明であるが、非常に多くの人に関心を持たれていたイベントであったことはまちがいないであろう。地域別の得票総数も把握できると、大連地域に居住する義太夫への関心を持つ人口を割り出すことも不可能ではないだろう。

そして7月21日（第735号、第2面）には、花月館で開催された賞品授与式を兼ねた淨瑠璃語りの当籤披露会の様子を伝える記事が掲載されている。一位の濱屋天壽の語りについては「……洗練された節廻し急所急所を押さえつける力は又頗る非凡と認めなければならない、抑

揚も巧妙で全體感から云ふと節々がしつかりして精確で、少しも曖昧な點がない」と評価されている。

また師範も含めどのような人が他の邦楽をたしなんでいたかについては、上記の新聞記事だけでなく、昭和4年に刊行された『満洲芸術壇の人々』に大連市以外の満洲全域を含めた人名録がある。本稿では紙幅の関係で詳細については言及しないが、例えば大連市内だけでも、能楽関係者は230名を越えており、また浄瑠璃は55名以上、長唄と琵琶は各40名以上、尺八は35名以上、箏は25名以上、他に清元、雅楽なども取りあげられ、氏名の他にプロフィールも掲載されている。この資料に上げられた人々は満洲地域での邦楽振興に何らかのかたちで貢献を果たした人物として周知されていたと考えられ、研究プロジェクトにおいても各人がどのような活動を行っていたか継続調査を行っている。

4－3　大連という都市にはどのように娯楽施設が整備されていたか

第二次世界大戦以前、「外地」の拠点の一つとして「大連」は、日本政府が進めた北進地域の重要エリアであり、南満州鉄道株式會社により都市開発が推進され、新たな文化環境が整備された都市空間として形成され、中国東北部への海からの入り口としても重要な役割を果たした。

本稿で焦点を当てた昭和10年の3件のツアー公演が行われた会場は、歌舞伎が南満州鐵道株式会社の協和会館、そして文楽が大正11年に建築された大連劇場、そして能楽は、財界人とも深い交流をもっていた能楽関係者自ら建造した大連能楽殿である。

これらのハードは、近代都市大連を象徴する建物でもあり、前者2つについては、現在中国で刊行されている絵はがきを収録した刊行物にもその外観が撮影された葉書などが収載されている。病院や銀行、図書館など公共性をもち、現存している南満州鉄道株式会社建設の建造物は市内中心部に次々と建設されていった。路面を走る電気鉄道も整備され、市内の重要な交通機関としての機能を果たし、次々と建造されていく百貨店、劇場、芝居小屋、映画館をつなぐ機能を果たし、そこに住む人々にとっても交通至便な街として歓迎されたことは云うまでもない。そして映画やダンスなど洋楽系の音楽だけでなく、日常生活のなかでの娯楽の一つとして「邦楽」を楽しむことのできる内地同様の観劇空間が形成されたといえよう。

すでに本稿で参照してきた『滿洲日日新聞』でも、明治42年正月に開場された歌舞伎座についての報道記事がみられる（記事⑯）。

＜記事⑯＞

●歌舞伎座の舞臺開

元日に華々しく舞臺開きをした歌舞伎座は非常の人氣であった午前十一時の案内が午後四時頃迄も幕を引かなかったなどは感心しないが是非共元日に舞臺開きをしなければならぬで萬事が整はぬ勝ちこれはありがちの事小言は云へぬ、舞臺の造りはなかなか見事に出來て土間も鶉も大連では難有い位ひ、三階迄出来て居るのまあ小屋らしい木戸前に幟りや積み樽の景氣よく、出し呉れる赤い緒の草履をつっかけて通ればさすがに春の装ひを凝らした、姐さんたちも大分見へた、愛宕町梅花に磐城町の菊屋お名染筋の旦那様たちも盛装の屠蘇機嫌、さしつおさへつ盃の數を重ねて居れば、別に幕を引けと八釜敷くいふものもなく、觀客を擧つての新年宴會といふ見へ、それでも楽屋や道具方は車輪の大いそぎ、吉例の三番叟がやがて始まつて、浦島の引抜きだんまり人數の少いといふ難はあれど、顔も衣裳も好い處丈け見せて幕を急ぐといふ見物への御遠慮と見たら差支なしいよいよ幕が開いて白縫物語、市藏の豊後之介は振りまひた花笄と共にやんやの大受け、役徳の秋作はおきまりの綺麗な顔、菊三郎の秋篠又よく見せて呉れた大事な處で電氣がつかず大いに歯痒かつたは役者の知らぬ事大連で見せて呉れる芝居としては文句なし定めし夜興業も面白かったらうが廻つた舞臺の木をしほに中途で御免を蒙つた（男シャク）

（『滿州日日新聞』明治42（1909）年
1月3日　第428号　第3面）

舞台開きが元旦とかさなったこともあり、新しく出来た「街」の象徴的な建物として住民からも歓迎されている様子がうかがえる。

また路面電車開通とともに総合レジャーランドとしての「電気遊園」も開園され、娯楽空間の整備に拍車がかかった様子が次の記事から伺える（記事⑰記事⑱）。

＜記事⑰＞

●言論　文明を表示せる電氣遊園

（前略）

電氣遊園設置の目的に就て吾人の推測し得る所は斯くの如し、其設備の實際を窺ひ、メリー、ゴー、ラウンドの如きボーリングの如き、ローラ、スケーチングの如き、一般人士の眼に珍とする者を集め來つて、兒女以上の者をも樂ましむる者有るを見て、吾人は荒涼たる滿洲の天地に於て、眞個文明の趣味に與かり得るを喜こばざる能わず、近江町線よりも奥町線よりも、吾人は伏見臺線の最先に開通せられたるを祝す、吾人は之と共に電氣遊園の開園を歡迎すと雖ども、其の仙台萩の淨瑠璃入活動寫眞に、何故最新蓄音機を用ひずして人間の淨瑠璃を配合したるかを怪しむ、活動寫眞と人間の義太夫、蓄音機と活動寫眞、孰れが調和其の宜しきを得るか、況んや拙劣なる太夫の實物淨瑠璃と巧妙なる太夫の蓄音器淨瑠璃とを對比し來たらば、何人か攝津若くは越路の蓄音器淨瑠璃を歡迎せざらんや、吾人は萬事に於て文明的調和を得たる電氣遊園に於て、唯一個此の小不調話あるを惜しむ者なり（駱駝生）

（『滿州日日新聞』明治42年（1909）年
9月26日　第694号　第1面）

＜記事⑱＞

●電氣遊園も開かる　廿五日電車の開通と共に

［前略］▽入場料は先づ遊園内に入るだけの入院料として三錢を拂い各遊戯等を試むるには夫々入場料を拂うを要すその料金は

メリー、ゴー、ラウンド　三錢
ボーリング、アレー　九錢
ローラー、スケーチング　六錢
室内射的（十二發）　十五錢
活動寫眞　一等　三十錢　　二等　十五錢

にして回数入場券を買い置けば三錢のものは二錢九錢のものは六錢十五錢のものは十二錢にて見らる〃勘定となる

▽今夜の番組　活動寫眞當夜の番組は左の如し

一、魔法の袋　二、北欧の冬景色
三　千代萩（御殿より床下迄淨瑠璃入）
四、踊のばら　五　心の取換
六　かっぽれ其の他手踊

（『滿州日日新聞』明治42年（1909）年
9月26日　第694号　第5面）

「電気遊園」は夜になるとイルミネーションが輝き、近代都市の名所として市民の憩いの場として提供された。残念ながら現在は両建造物は取り壊されている。

おわりに

本稿では、先行研究では殆ど言及されることのなかった大連市における日本伝統音楽・芸能の日本からの移動公演について、現地発行の一般日刊新聞および専門月刊新聞掲載記事を対象として、邦楽受容の状況について分析を行った。外地に住む日本人が多くの情報を受け、想定していたより多くの邦楽に触れる機会が与えられていたこと、また内地と同様に邦楽の実践に関わることが可能な音楽環境であることが確認することができた。現地では、時局的にみて官指導による日本音楽・芸能の公演が行われていたことも否定できないが、鑑賞者であると同時に日本音楽・芸能のサポーターとしての役割を果たしていたともいえるのではないだろうか。

今後は、共同研究プロジェクトとしては、本稿で言及した日刊紙や月刊紙記載の情報のデーターベース化を促進させ、多角的な視野からのデータ分析を遂行していきたいと考えている。当然のことながら日本人以外の現地の人々が邦楽にどのような関心を寄せていたのか、また現地で生まれた世代の人々は、21世紀の現在邦楽と縁遠く、距離を置いている若者と同様な環

境にあったのか、逆に外地であるからこそ日本人としてのアイデンティティ確認のツールとして身近な音楽として接していたかについても考察を深めたいと考えている。本稿を読まれた読者の方々からの情報提供もぜひ届けていただくことにより、さらに満洲を含めた「外地で鳴り響いた邦楽」の実態を解明していくことが出来ると信じている。　（2011 年 2 月 28 日脱稿）

＜注記＞

1）筆者はすでに、主要参考文献に記載しているように、2009 年より本格的に調査に着手し、順次研究成果を公表する機会を得ている（仲　2009a, 2009b,2010a,2010b,2010c,2011）。本稿は、同志社女子大学 2009 年度、2010 年度個人研究費、同志社女子大学 2010 年度研究奨励金（研究課題「外地に鳴り響いた日本の「伝統音楽・芸能」: 教習と上演の実態調査」）、そして公益法人トヨタ財団 2010 年度研究助成プログラム「植民地時代の旧満州地域および台湾の日本伝統音楽・芸能の普及の実態とその意義 ―　上海租界地域および国内との比較考察を通して」（研究代表者　仲万美子）の研究成果の一部である。

　本稿では、主に社団法人東洋音楽学会西日本支部定例研究会の口頭発表原稿をベースに、その後の調査で明らかになった資料を引用し、加筆したものである（仲　2010b、2011）。初出紹介資料も多いことと、当時の読者がどのような情報提供を受けていたかを本稿読者に提供することを考慮して、引用する際、出来るだけ省略せずに全文引用するようにした。但し引用にあたっては原文で使用されている表記を転記したが、ふりがな及び写真については省略した。

2）紙幅の関係で記事本文の引用は行わないが、この歌舞伎公演が行われている大連で、清元延愛喜追善と小唄の会（6 月 29 日、第 10500 号、第 5 面）、防空献金のため開催された長唄舞踊の夕べ（昭和 10 年 7 月 1 日　第 10501 号、第 5 面）も開催されている。また、市村羽左右衛門の娘で、吾妻流の家元吾妻春枝の公演も 7 月末に行われ関連記事が掲載された（7 月 2 日、24 日）。

3）大連市には大正 11 年 4 月、市内中心部の公園内に能楽堂が創建されているが、客席がなく積極的な活用は行われなかった。

4）本見解については前述の共同研究のメンバーでもある中嶋謙昌の先行研究があり、本プロジェクトでも、現地刊行の定期刊行物の詳細な調査や関係者へのインタビューを通して研究を進めている。また森川荘吉とも懇意であった宝生流能楽師辰巳孝一郎も積極的に渡満し出張稽古を行ない、本移動公演においても尽力した。本調査研究でも外地／内地の枠を越えた教習活動が実施されていたことの実態が明確になってきた。尚同孝一郎の孫に当たる辰巳満次郎もプロジェクトのメンバーである。

5）国内で刊行されている定期刊行物『宝生』（わんや書店刊行、昭和 10 年 11 月号）で、森川荘吉が自ら紹介しており、この「能楽堂」の存在は本研究においても大変興味深いものである。能楽移動公演会場となった建造物について、すでに 2009、10 年にも筆者が現地調査を行い、能楽殿の一部ではないかと推定できる建物にいきついているが、現在確認作業を継続して行っている。また、絵はがきは、本移動公演にも尽力された江島伊兵衛の孫であるわんや書店社長江島弘志氏所蔵のもので、本件研究プロジェクトのために資料提供をうけた。この事例にみられるように、関東大震災、戦禍を経て多くの資料が散逸していることは免れないが、個人所蔵資料の存在も、本研究遂行には大きな役割を果たしうるものと考えており、資料提供を望むものである。

6）能楽の満洲を含む中国エリアへの公演については、この宝生流宗家による公演以外に、観世流宗家や梅若流の公演も行われている。本研究では、今後も継続調査をおこない、内地発行の能楽関係定期刊行物『宝生』『観世』『能楽画報』『能楽時報』などに掲載された記事も含め詳細に調査を進めている。

＜主要参考文献＞

蛯原　八郎　1936（1980）『海外邦字新聞雑誌史　付海外邦人外字新聞雑誌』東京：名著普及会。

井上謙三郎　1936 『大連市史』大連：大連市役所。

小西潤子・仲万美子・志村哲編著　『音楽文化学のすすめ』京都：ナカニシヤ出版。

李　相哲　2000 『満州における日本人経営新聞の歴史』東京：凱風社。

仲　万美子　2004a “From a yearning for exoticism to an authentic performance experience:

The Western understanding of East Asian traditional performing arts 從憧憬異国情調到体験正統表演的道程：探討西方人如何認知東亜綜合藝術 ”
37th ICTM WORLD CONFERENCE FUZHOU & QUANZHOU, CHINA（Tuesday, 6 January,Fuzhou, Fujian Normal University）Session 24E　The Manipulation of Musical Traditions　Chair：Dr. David W. Hughes, United Kingdom　口頭発表原稿。
2004b 東アジアの総合芸術に対する異文化理解の意味～ 20 世紀初頭の京劇、歌舞伎の海外公演を事例として」日本音楽学会創立 50 周年記念国際大会プロシーディングス『音楽学とグローバリゼーション』。
2008「大正時代の京劇来日公演に関わる知識人ネットワーク ― 異文化・自文化に通じた芸術文化の通訳者の果たす役割－」『中国都市芸能研究』第 7 輯、pp.25-50.
2009a「明治末から昭和前期における謡の修得プロセス――外地／内地での個人体験を事例に――」（社）東洋音楽学会第 60 回大会（10 月 18 日、沖縄県立芸術大学）口頭発表原稿及び配付／提示資料。
2009b “How Japanesen Residents in China studied Japanese Traditional Music in the Early 20th Century” CHIME（European Foundation for Chinese Music Research” 第 15 回大会パネルディスカッション “The Role of Music for the Japanese Cultural Policy in the Colonial Period（1895-1945a）” 口頭発表原稿、提示資料。
2010a 「文化創造都市大連の音楽文化環境 ― 『江戸の音楽』、『東京の音楽』が鳴り響く空間―」民族藝術学会第 26 回大会（4 月 24 日、江戸東京博物館）口頭発表原稿及び配付／提示資料。
2010b「旧満州で知り得た音楽・芸能情報 ― 日本語活字メディアを事例に」
（社）東洋音楽学会西日本支部第 248 回定例研究会（7 月 10 日、京都市立芸術大学）口頭発表原稿及び配付／提示資料。
2010c「東アジアの伝統芸術海外興行を支えるシステム形成について：20 世紀初頭の京劇、歌舞伎、能を事例に」比較文明学会第 28 回大会（11 月 28 日（日）池の坊短期大学）口頭発表原稿及び配付／提示資料。
2011「旧満州で知り得た音楽・芸能情報 ― 日本語活字メディアを事例に」『（社）東洋音楽学会 西日本支部 支部だより』研究発表要旨、第 68 号、2-3。
中嶋謙昌　2008「満州能楽界の形成 ― 日露戦争後の大連を中心に」
藝能史研究会 2008 年 4 月例会発表要旨『藝能史研究』182 号、pp.46-47。
2010 「大連における能楽社会の形成」共同研究『満州における演劇・映画の諸相』第 2 回研究会（早稲田大学、2 月 27 日）発表資料。
西　創生編著　1929 『満州藝術壇の人々』（『日本人物情報大系　第 19 巻　満州編 9』1999 年、皓星社）
大江志乃夫他共編　1993『文化のなかの植民地』岩波講座『近代日本と植民地』第 7 巻、東京：岩波書店。
篠崎嘉郎　1922 『大連』大阪：大阪屋号書店。
塚瀬　進　2004 『満州の日本人』東京：吉川弘文館。
山本有造編　1993 『「満州国」の研究』京都：京都大学人文科学研究所。

＜主要参照定期刊行物＞

［中国語能楽係掲載誌］

『滿鮮謠曲界』昭和 9 年 12 月（通号 19 号）から昭和 12 年 8 月号（通号 51 号）参照（内 3 号分欠号）。
『滿州梅若』『滿州日日新聞』『滿州日報』『大連新聞』『新京日日新聞』

［日本語関係掲載誌］

『能楽画報』『能楽新報』『能楽』『謡曲界』『謡曲新報』『大観世』『観世』『宝生』『梅若』